

## パプアニューギニアの編技法を応用した作品制作

### Creative Works Utilizing New Guinea's Netting Techniques

岡本 泰子

OKAMOTO Yasuko

#### 要旨

学生の頃、日本におけるファイバーアートのパイオニアである嶋貫昭子先生の集中講義があり、繊維造形とオフルーム技法の世界を知った。もともと素材と構造で表現する立体作品に興味がありオフルーム技法での制作展開に憧れていたが、素材や技法についての経験も浅かった筆者は仕方なく織機を使った技法で模索していた。それから数年後、嶋貫先生のご自宅で洋書を読む勉強会「puzzle会」に参加する機会に恵まれた。

ここでは、Peter Collingwood著“THE MAKER'S HAND -A Close Look at Textile Structures-”（糸状の要素が機能的な構造を有すものを中心に作り方を分析、図式化したもの）に掲載されている世界の手仕事をテーマ毎に訳しサンプル制作を行う。その中で後の道標となる、ある技法に出会った。

それはパプアニューギニアの民族が身につける装飾品を解析したもので、本来はもっと小さく緻密な構造なのだが、素材を変えて試作したところ、元の装飾品とは全く異なる伸縮性のある強い布構造が出来上がった。素材の違いで独特の編み目や畝が生じることに興味を持ち、この技法による作品制作が始まった。

●キーワード：繊維造形 (fiberwork) / 編技法 (netting techniques) /

パプアニューギニア (Papua New Guinea)

#### I. はじめに

織機によって織られた布と、編むことで面となった布では、作業上の制約や完成した布の性質が異なってくる。垂直水平の構造をもつ織物制作において、線素材は布にさまざまな質感を与える。筆者は素朴で荒々しい質感を求めて工業製品であるサイザルヤーンを用いていたが、この素材の持つ特性に無理なく形を成す方法として織機を用いずに布構造を作るオフルーム技法による表現方法に辿りついた。これは過去に取り組んでいた制作技法だが、今回「素材・構造・技法の関係」について改めて考察するため、制作プロセスに関する記録をまとめたものである。

#### II. 研究の目的

繊維造形作品における新たな表現方法について、パプアニューギニアの伝統技法をもとに、繊維素材と技法に的確な道具を作ることによって応用展開させることを目的とする。

#### III. 研究の方法

Peter Collingwood著“THE MAKER'S HAND” p10-11掲載の「Headband | Sepik River, Papua New Guinea」を訳し、Fig.6-7に基づきサンプルを制作する。サンプル制作で得られた結果を活かし、造形作品へと展開する。

##### ① 原文を訳す

長さ50cmの頭飾りはパプアニューギニアのセピック川流域で制作された。骨の針と糸を使い、フレームに張らず、生地を手を持ちながら作業する。完成した生地はプリーツ状に成型後、寶貝や塗料で装飾が施されている。これらはかなり難解な構造のlinking(絡み編み=リンク)で作られている。Fig.6 上部は1本の糸が前の段と並行に連続するようにリンクしているため、糸はひと目おきに飛び越すコースを辿っていることを示す。構成された生地表面は深く波打ち、畝が接近する事で溝部分の糸の流れは隠される。的確な密度で編むことで畝は保持される。波型構造を形成する条件は作業における針の挿入加減と考えられ、その表情は糸種や撚りの程度により異なる。

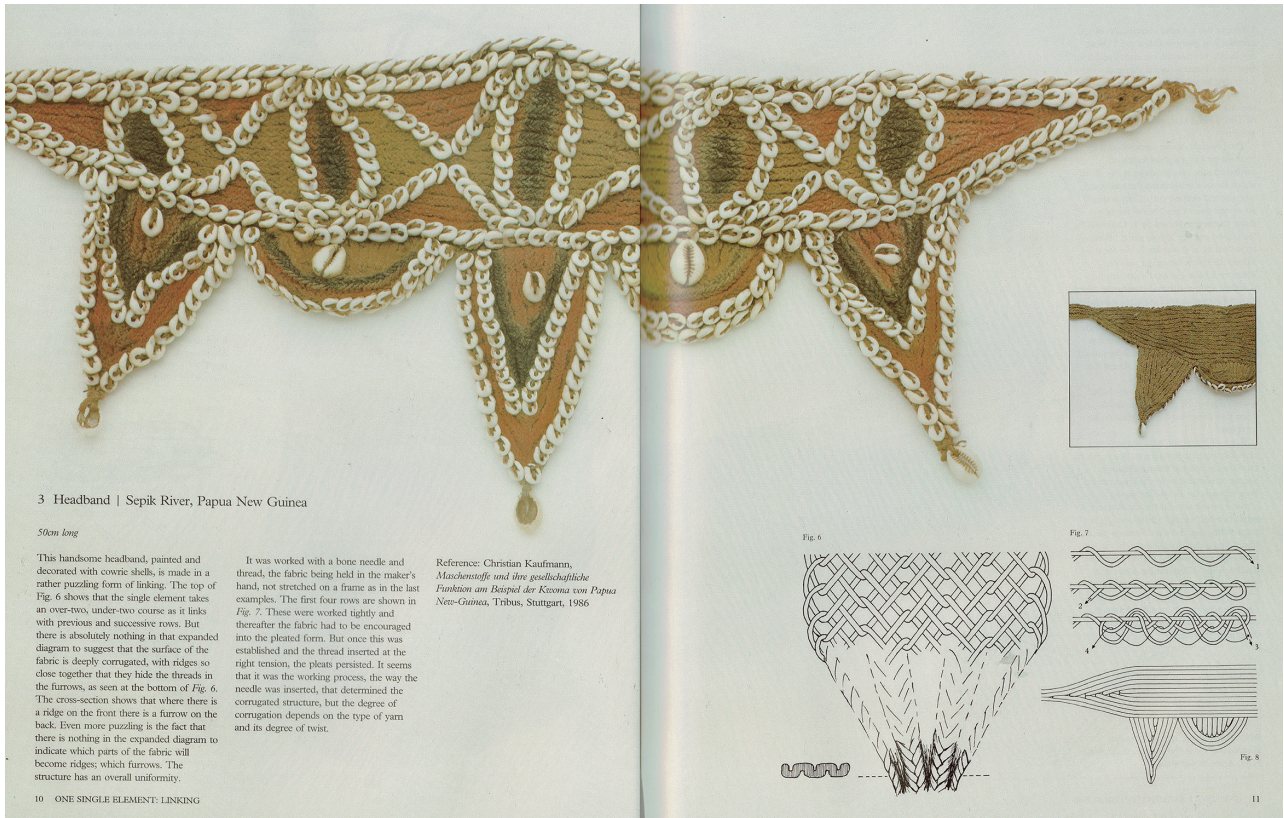


図1 THE MAKER'S HAND p.10-11より

② サンプル制作：糸について



図2 サイザルヤーン



図3 巻いた状態

サイザルヤーンはリュウゼツランの葉脈繊維を片撚りにした張り強い糸である。1990年代は造形素材として糸問屋で購入可能であった。ジンバブエ産が主流だったが現在は扱われておらず、造形素材ではなく牧草を結束する目的のバインダーコンバイン（バングラディッシュ産）として農業資材店で売られている。これも化学繊維製品に置き換わりつつある様子であった。(図2,3) 糸には紡績由来の工業油が付着しており、染色の際はアルカリと澱粉分解酵素により糊抜き精練が必要である。発色を良くするために漂白後、直接染料や反応性染料にて浸染を行なう。

③ 道具について

まず、魚網を編むための網針を模した道具を制作したが、巻ける糸量が少ない上に幅が影響して編み目が粗く、この技法には不向きであった。太いサイザルヤーンは巻き取り自体が難しいため、木の板を削って縫い針を作った。スギなどの針葉樹は加工しやすい反面、一旦ささくれが生じると毎回繊維が挟まり針自体が裂けてくるため目の詰まった木が適している。大きな作品になると、各パーツに針をつけたまま同時に編み進めるため、歯ブラシの軸を加工した針なども作ってみた。改良を加えた結果、長時間手に持っても疲れにくく、編み目を拾いやすい形状の針が完成した。(図4) 針の幅も布の構造に影響を与えることが分かった。



図4 使いやすい針のサイズ



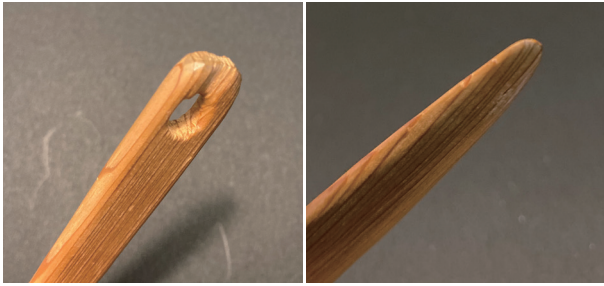


図5 針穴の溝

図6 針先の形状

針穴：太い糸でも編み目を通せるよう溝を彫る。(図5)

針先：左右を薄く滑らかにし、糸割れを防ぐ。(図6)

#### ④ 作り目

原文ではフレームを使わずに編み出すと記載されており種糸にサイザルヤーンを絡める方法を試みたが、柔らかい素材では上手くいかず、細い竹ヒゴに折り曲げた糸を2本同時に絡み合わせることで解決した。竹ヒゴは動かさず、糸を保持した手指を動かしながら絡めていく。(図7,8,9)

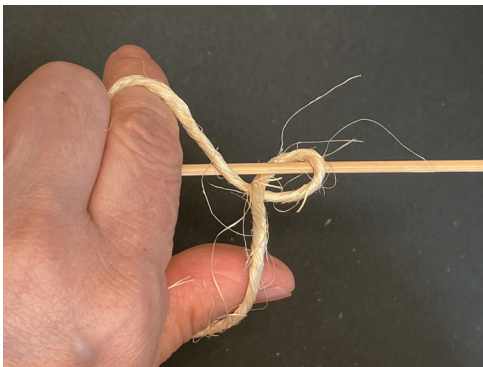


図7 作り目1



図8 作り目2

前段の糸の流れと並行するように針を通して行くと、必然的にひと目飛びにリンクすることになる。(図10, 11, 12)

この構造は“stepped linking”と呼ばれている。

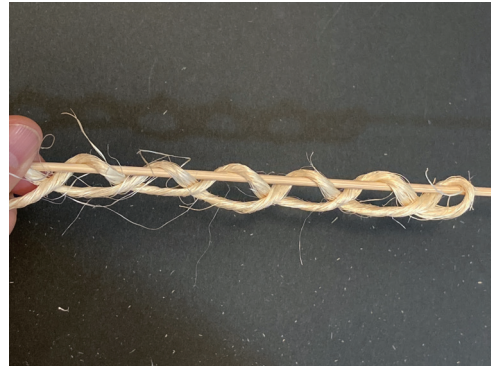


図9 作り目の完成

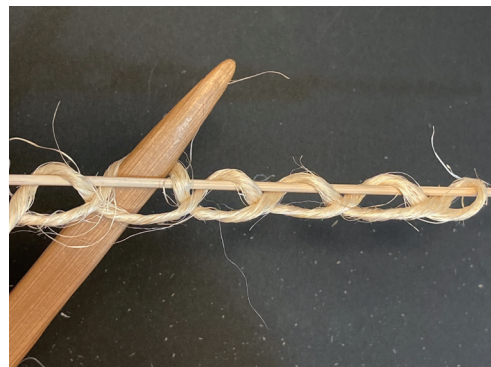


図10 編み方1



図11 編み方2



図12 編み方3

使用する糸は、なるべく継ぎ目が出ないよう長い方がよいが、編むにつれ撚りが甘くなるため4尋(5m程度)ずつに切って作業した。編み進めると自然に生地に波型



のうねりが現れることが確認できた。また、作り目はパーツの幅に合わせて偶数で作ると効率よく編むことができる。これは往復する際に針を入れる向きが揃うためである。波打つことで針を入れる位置が分かりやすくなることがわかった。(図13)

次の糸を足す際はサイザル麻の持つ腰の強さが生かされ、糸端同士を結ばず2～3目重ねるだけで糸を継ぐことができた。



図13 下面から見た波型構造

#### ⑤ 応用作品への展開

当初は頭飾りのような先細りの形を編む工程がわからず、糸の動きで生じる柄や、表面の畝の変化を活かして長方形に編んだパーツをモザイク状に組み立てる方法で、波頭や滝、雲を感じさせる大きな作品を制作した。

サイザルヤーンは直接染料で濃淡数種類のブルーに染め分けた。白い部分は事前にサイズを測ってから折り返し位置を括り、紺糸を染めた。紺糸で編んだところ、織物とは異なるステッチ様の表現が可能となった。(図14)

生地は構造はルーズで、垂直方向に伸縮性を持ち、玉簾のように水平方向にずれる性質をもつ。生地を左右にずらす事で表面にさざ波状の模様が表現できる。(図15)

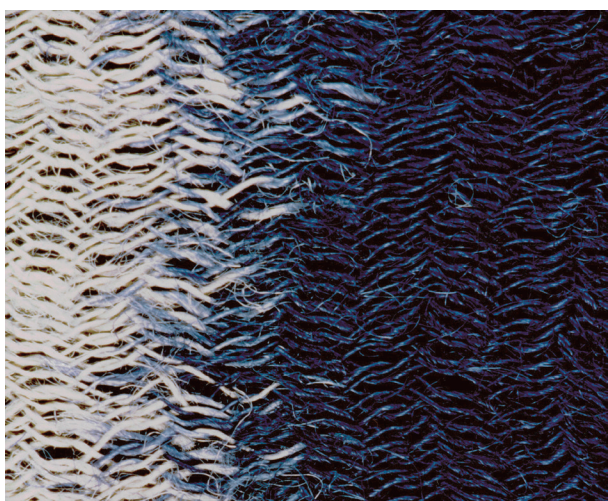


図14 紺糸によるパーツ

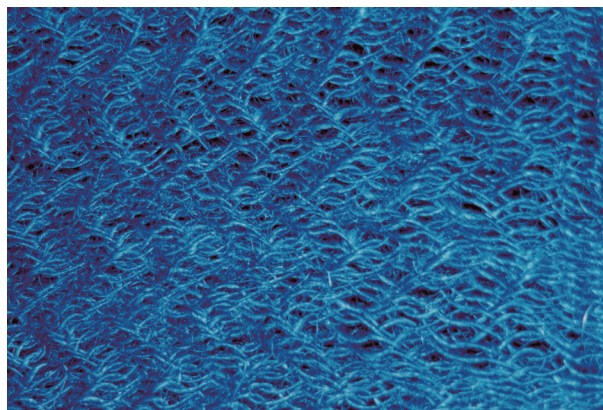


図15 表面のさざ波模様

サイザルヤーンには2種類の太さがあり、太い方がよりディテールが強調される。(図16)

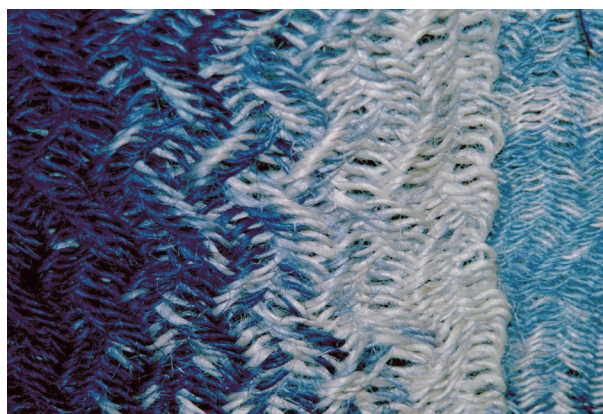


図16 左：太い糸、右：細い糸によるディテール

#### ⑥ 制作の様子

原文に記載の通り、手に持って編むと効率が良い。(図17) 別々にパーツを編み、最終的に吊るしながら輪の部分を引き合わせ、一枚の布にする。(図18, 19)



図17 パーツを編む





図18 吊るした状態で各パーツを繋ぎ合わせる



図19 徐々に吊り上げて編み進める



図20 完成作品：Blue'94 W800cm×H200cm

### Ⅲ. 研究結果

筆者が織素材として使っていた素材が、より無理なく形を成す方法としてこの技法は適していた。(図19, 20)

針と一本の糸というシンプルな技法だが、素材や網目の密度、糸の引き加減、パーツの組み方によって多様に表情が変化する点から制作展開への可能性と魅力を感じた。

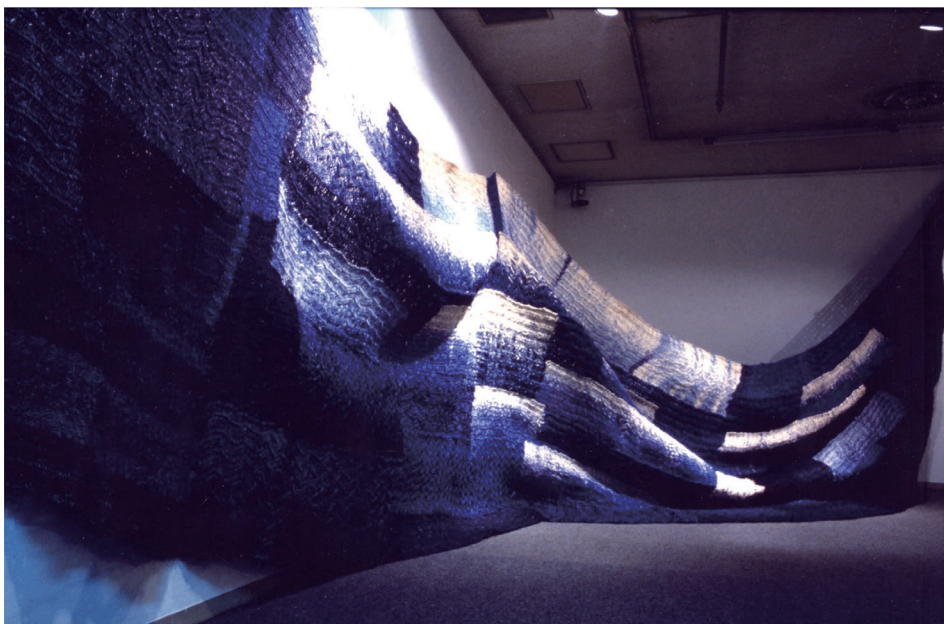


図21 Blue'94 異なる展示方法の試み



#### IV. 今後の展開

パーツを繋ぎ合わせる位置によって立体的な展開も期待できる。構造的に左右方向はつながりやすいが、上下方向は畝やひと目越しの流れを読み取るのが難解で、元の組織同様に編み合わせることが難しい。この技法の特徴である畝や減らし目による紡錘形、そして素材研究についてはこの後の作品制作にて解決することとした。

#### V. 最後に

最初の作品制作から10年後、イギリスNaylandの古い学校を利用したPeter Collingwood氏のアトリエを訪問する機会に恵まれた。そこには本で紹介されていた数々の民俗資料やサンプルが所狭しと並んでいたが、その中にあの頭飾りを見つけたときは心が躍った。特別に触れさせていただき、裏側の様子をじっくり観察した。思いの外、軽く柔らかな手触りであった。所々に結び目が見られることから、現地では結びながら編み進めていたということが読み取れた。(図22)他に自分が作ったものによく似た木製針で編みかけたサンプルなどもあり、世界各地で使われてきたであろう「針」という道具に大変興味を持った。この技法について、パプアニューギニアではかつて男性が骨の針で編んでいたというところまでは情報が得られたが、博物館で完成した製品と併せて道具を見る機会はとても少ない。残念なことに現在はこの伝統的な編み技法は受け継がれていないらしい。同じ地域では今でも女性が別の伝統的な編み技法を用いて旅行者の販売用には昔ながらの靱皮繊維で、実生活用には化学繊維で網袋を編んでいる。神聖な祭りなどで使われたこの頭飾りの編み技法の制作工程に関する情報は乏しく、今後の研究テーマとして取り組んでいきたい。

#### 参考文献

- Peter Collingwood. THE MAKER'S HAND, BELLEW, 1987, pp.10-11  
上羽陽子、山崎明子 編『現代手芸考』フィルムアート社, 2020年, pp.88-91



図22 パプアニューギニアの頭飾り (裏側)

Peter Collingwood氏 所蔵